



## 趣旨説明

松嶋, 登

---

**(Citation)**

神戸のSTS : スプリング8をめぐるサイエンス・ベスト・イノベーション研究と低線量被曝の歴史研究:9-11

**(Issue Date)**

2021-02

**(Resource Type)**

book part

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

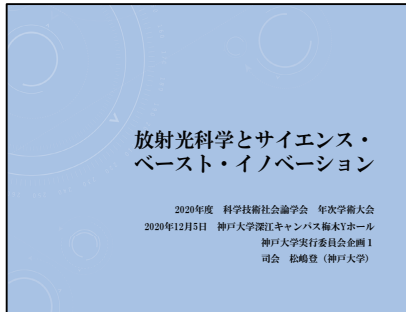
<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90007909>



# 神戸大学実行委員会企画1

## 放射光科学とサイエンス・ベースト・イノベーション

松嶋登（神戸大学）



松嶋：神戸大学の松嶋でございます。どうぞよろしくお願ひ致します。このセッション、本来は報告者の方に集まっていたいて、リアルタイムの中継をする予定でしたが、コロナの影響で、神戸大学の関係者にはリアルに集まっていたき、遠方の方にはリモートでご参加いただくハイブリッドセッションになっております。場合によっては不手際があるか

もしれませんけれど。新たなチャレンジということで、ご寛容いただければと思います。

このセッション、「放射光科学とサイエンス・ベースト・イノベーション」という、経営学者が企画させていただいた実行委員会企画でございます。実は、17年前の神戸大会で同じように経営学からのSTSセッションを持たせていただきました。改めて振り返りまして、17年前が本学会の草創期にあたる第二回大会であったということに改めて気づきました。当時、私は、神戸大学の経営学研究科を修了したばかりの若手でございます。17年前の第二回大会のセッション構成は、このようなかたちでした。そのときは、塚原先生にオーガナイザーをお務めいただき、今は関西大学に移籍された原先生もいらっしゃいました。私も前任校の東京都立大学専任講師の肩書で報告させていただきました。

今回、私が座長として新しいセッションを企画させていただいたわけですが、当時の経営学においてSTS理論というのは、どこか「危険な飛び道具」というか、新しすぎて「それ、経営学に持ってきて本当に大丈夫なの？」っていう懐疑的な意見もあった、そんな時代でございました。

原先生は、MacKenzieの「技術の社会的形成」に依拠されたご研究をなされており、私は、Woolgarの構築主義であったりとか、Virtual Societyの議論なんかに影響を受けて学位論文を仕上げ

### 17年ぶりの神戸大会

第二回大会でのセッション構成

「テーマセッション： STSとMOTの相互浸透：バイオメディカル産業の事例を通して (15-A-III-T)」

オーガナイザー： 原拓志（神戸大学）、塚原東吾（神戸大学）

コメントータ： 松本三和夫（東京大学）、松原洋子（立命館大学）、佐倉統（東京大学）

- ・ 原拓志（神戸大学）
- ・ 「医薬品の社会形成とイノベーション・マネジメント」
- ・ 松嶋登（東京都立大学）

「バイテク・ベンチャーによる『技術』と『社会』の再構成」

- ・ 入江信一郎（京都工芸繊維大学）

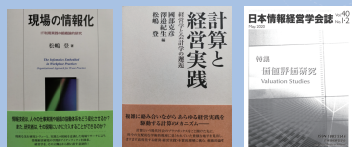
「ベンチャー企業は制度的障壁をどのように克服するのか」

- ・ 当時は「危険な飛び道具」感のあったSTSの理論が、今や経営学の研究において定着している
- ・ 技術の社会的形成 (MacKenzie and Wajcman, 1999; Williams and Edge, 1996)
- ・ 科学（技術）の説明原理をめぐる構築主義論争と情報化 (Grint and Woolgar, 1997; Woolgar, 1988)
- ・ アクターネットワーク理論 (Latour, 1987; Callon and Latour, 1992)

↓

國部・深邊・松嶋 (2017) 『計算と経営実践：経営学と会計学の邂逅』有斐閣

「価値評価研究」『日本情報経営学会誌』2020年5月



た直後であります。京都工芸繊維大学の入江先生は、Callon や Latour らによる「アクター・ネットワーク理論」を経営学に取り入れるチャレンジを報告していました。しかし今や、それらはもう当然ながら経営学の理論として根付いております。そういう意味では、我々のセッションは、先見的でありつつ、間違っていなかったなと振り返られるわけです。

しかし、17年目の課題として、本当に経営学は本当に STS の理論を使いこなせているのだろうかという課題設定を行いました。確かに STS の様々な理論は、今や経営学で当たり前前に利用されています。しかし、どちらかと言うと、それはアナロジーとして引用されることが多く、本当にその理論的含意の神髄というのは分かっているのだろうかというところが、実は疑問な研究も多いのも確かなわけです。これから第1報告で桑田敬太郎さんに報告してもらいますが、その一つにフェミニストであり、量子物理学者の Barad による entanglement 概念などは、最近、よく経営学でも引用されております。これは「もつれ」というふうに解されているわけなのですが、「要するにもつれてるんです」というふうな説明を聞くと、そんな雑な使い方の良いのかと。言うなれば、「もつれてるのは、お前の頭なんじゃないか」という冗談がよく言われているわけでございます。今、経営学でも STS の理論的動向でも見られる物質的転回がブームで、経営学の様々な領域で様々なメタ理論を援用した議論が始まっており、じつはメタ理論の側の混乱に引きずられて様々な混乱が見られる状態なのですが（その文献展望と日本の若手研究者による経験的研究をまとめた著書を出版準備中です）、その本当の意味合いは何なんだろうかということを実際に考え

## 物質的転回@経営学？

- 17年目の課題
  - STSの理論や概念を参照する応用研究ではありつつ、科学・技術それ自体の実践に注目するという、STSのスピリッツは引き継いでこなかった
    - サイエンスで開発された新規な知識を要件として、これを応用するマネジメントを探求するという問いを持ち続けてきたMoT研究（第一報告）
    - サイエンスがマネジメントの対象であり、マネジメントされた実践であることに向き合っていない
- 近年の流行、Materiality in Management Studies
  - マネジメント研究：制度派組織論、組織ルーティン研究、組織不祥事研究、批判的経営研究、MoT
    - メタ理論/アクターネットワーク理論、構築主義、ルフェーブルの空間社会学、ハラッドの新実在論
    - メタ理論が抱えていた混乱をそのまま引き継いぐ
  - 実在の根拠を主体の解釈に求めてしまう人間主義 (humanism) の克服を目指す物質的転回 (material turn)
    - カレン・バラッドのエージェンシャル・リアリズムを参照した社会物質性 (sociomateriality) (Orlikowski, 2007; Leonard, 2011; 松嶋, 2015)
    - 技術と組織が根源的に不可分である (Orlikowski, 2007, p. 1438)
    - アナロジーとしての(量子)「もつれ (entanglement)」
      - 技術と組織は分けがたくもつれている？

Matsushima, N. (ed.) *Materiality and Management: Theoretical Implications of the Concept of Materiality in Management Studies*. Springer, forthcoming.

What has the concept of materiality, the latest meta theories in the humanities and social sciences, brought to management studies? Recent management studies, which focus on materiality, try to overcome the dogma that postmodern management studies have fallen into, which looks for the beginning of the organizing process into subjective interpretation. Institutional organization theory focuses on the material on which the symbolism of institutions is inscribed. Organizational routine research seeks to unravel the material dimension of organizational performative practices. Organizational wrongdoing research critiques material measurement practice based on social constructionism. Critical management studies focus the material space as a way to counter the humanistic concept of time. Science based innovation challenges socio-materialistic science practices that originate from devices for MOTs that have not been able to penetrate into the workings of science and technology actually. In order to understand this issue systematically, it is necessary to understand how the studies referring to structuration theory, which had a significant impact on management studies as a whole around the 1980s, have each solved endogenously generated issues. Up-and-coming researchers in Japanese management studies conduct empirical research that draws out the implications of the concept of materiality.

てみたい。17年目の経営学におけるSTSの可能性について、改めて再点検をしたいというのが、このセッションの目的でございます。

最後に、本セッションの建て付けだけ、説明させてください。今回のセッションですが、2つのパーツに分かれます。第一部が、経営学者による最新STS研究の援用ということで、これが第一報告です。先ほど申し上げました、Baradの新實在論を代表として議論されている物質的転回が、経営学においてどういう意味があるのか。これに対して、STS論者の塚原先生からコメントをいただく。これが一つ目のパーツです。

続く第二部がですね、これ少し面白い着想だと思っているのですが、経営学者が参照するKaren・Barad自身はフェミニストとしてSTS論者であるわけですが、量子物理学者でもあるわけです。従いまして、STS研究者の理論を援用するだけでなく、量子物理学者、サイエンスの実践者による経営学っていうのを逆に考察してみてもどうかというチャレンジがあります。それが、第二報告でご報告される、Spring-8を擁する理化学研究所のセンター長の石川先生であり、それから第三報告でご報告される、東北大学で新しい放射光施設を立ち

上げられている高田先生です。彼らの、物理学者の実践、サイエンティストの実践から見た経営学をご報告いただきます。それに対して、経営学者の重鎮である桑田耕太郎先生に、経営学的含意を討論いただくという建て付けで、今回のセッションを組ませていただきました。

## 本セッションの建て付け

### ・ 経営学者による最新STS理論の援用

- ・ 第一報告 桑田 敬太郎 (神戸大学経営学研究科 博士課程後期課程)、原 拓志 (関西大学商学部 教授)、松嶋 登 (神戸大学経営学研究科 教授)  
「放射光施設が形成する社会物質的エコシステム」
- ・ ディスカッション 塚原 東吾 (神戸大学国際文化学研究科 教授)

### ・ サイエンスの実践者による経営学

- ・ 第二報告 石川 哲也 (国立研究開発法人理化学研究所放射光科学センター センター長)  
「先端科学技術基盤と経営学」
- ・ 第三報告 高田 昌樹 (東北大学国際放射光イノベーション・スマート研究センター 教授)  
「先端科学技術基盤の社会的責任」
- ・ ディスカッション 桑田耕太郎 (東京都立大学経営学研究科 教授)

## 謝辞

この文理融合型のシンポジウムの開催は、以下の助成を受けたものです。

JSPS 科研費 18K01836 「サイエンスが浸透した社会におけるイノベーションの理論基盤の整備と経験的研究」

神戸大学社会システムイノベーションセンター研究プロジェクト「物理学実践の解明を通じたイノベーション・マネジメントの探求」